

【旧約聖書日課】ミカ書 2章12～13節

12 ヤコブよ、わたしはお前たちすべてを集め

イスラエルの残りの者を呼び寄せろ。

わたしは彼らを羊のように囲いの中に

群れのように、牧場に導いてひとつにする。

彼らは人々と共にざわめく。

13 打ち破る者が、彼らに先立って上ると

他の者も打ち破って、門を通り、外に出る。

彼らの王が彼らに先立って進み

主がその先頭に立たれる。

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 19章11～16節

11そして、わたしは天が開かれているのを見た。すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は、「誠実」および「真実」と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる。12その目は燃え盛る炎のようで、頭には多くの王冠があった。この方には、自分のほかはだれも知らない名が記されていた。13また、血に染まった衣を身にまどっており、その名は「神の言葉」と呼ばれた。14そして、天の軍勢が白い馬に乗り、白く清い麻の布をまどってこの方に従っていた。15この方の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。また、自ら鉄の杖で彼らを治める。この方はぶどう酒の搾り桶を踏むが、これには全能者である神の激しい怒りが込められている。16この方の衣と腿のあたりには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

【福音書日課】マタイによる福音書 25章31～46節

31「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。32そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、33羊を右に、山羊を左に置く。34そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。35お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、36裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』37すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。38いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。39いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、

お訪ねしたでしょうか。』⁴⁰そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

⁴¹それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。⁴²お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、⁴³旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』⁴⁴すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気があったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』⁴⁵そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』⁴⁶こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』

ひとつに集められるときに【こども説教のために】

今日は、教会暦の一年一巡りの最後の日曜日、「終末主日」です。日本基督教団の教会では、「収穫感謝日」とも呼んでいます。「北米ではちょうどこの時期に「収穫感謝祭」を祝いますし、日本でも11月は「収穫感謝」に関連する行事が古くから行われてきたことによるものです。

本来であれば、おもに秋に収穫されたこの一年の実りに感謝して、皆が共に集まり喜びを分かち合う行事が盛んにおこなわれる季節です。「収穫感謝」は、ただ収穫物や食べ物を得られたことに感謝するというだけのことではなく、わたしたち皆が共に命を与えられていることに感謝することでもあるのでしょうか。

教会の祈りとしておこなう「収穫感謝」も、神から与えられた食べ物や「もの」を感謝するだけでなく、わたしたちに与えられた命そのものを感謝し、命の源である神への感謝を新たにします。

「収穫感謝」に限らず、わたしたちは、食事の度ごとに「感謝の祈り」をささげることを教えられてきました。わたしたちは、主の祈りの中で「日毎の糧を与えたまえ」と祈っているのですから、それを与えていただいたことに感謝を示すのは、当然のことです。中には、間食で小さな菓子を食するときでさえ必ず「感謝の祈り」をささげる人もいます。小さなことで、徐々にいい加減になってしまうこともあるかもしれませんが、それくらいの習慣になるまで心がけることも大切でしょう。

わたしたちには、口からいただく「糧」ばかりでなく、目や耳から、あるいは別の形でいただく「糧」もあるでしょう。特に、小さくて与えられたことにも気づかないような「糧」にまで目を向けて、感謝することも、必要なことかもしれません。「小さい者」に目を向けることは、主イエスが大切にされたことです。それによって、わたしたちの人生の生き方が大きく変わるからです。

「この最も小さい者の一人に」

福音書日課（マタイ 25 章）で、主イエスは「終末の裁き」という当時の多くの人々にとっては重大な関心事であったことを取り上げて、教えを語られています。「終末」とか「最後の審判」と言われても、現代人のわたしたちには、どこか絵空事のように思われるところがあるかもしれません。死後のこと、終末のことよりも、生きている現在のことのほうが重要であるし、差し迫った問題なのです。

実のところ、主イエスの関心事も、「終末」のことよりも現在のこと、「死後のこと」よりも生きている者のことに、いつも向けられていたのではないのでしょうか。「復活」についての議論を吹っかけられたときも、主イエスは、「死者の復活」について事細かにお答えになられることなく、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」（マタイ 22:32）とおっしゃられているのです。

確かに、主イエスの時代の人々の中には、現世に悲観して、死後の「来世」に希望をかけた者が多くいたのでしょう。そのような人々に対して、宗教指導者たちが、「死後の希望を実現させるためには、生きている間に善行を重ねておかなければいけない」と教えることもあったに違いありません。

主イエスの教えは、そのような教えのようにも聞こえます、「あなたがたが、主の兄弟であるこの最も小さい者の一人に、飢えているときに食べさせ、渴いているときに飲ませ、旅をしているときに宿を貸し、裸のときに服を着せ、病気のときに見舞い、牢に囚われているときに訪ねたならば、終わりの日にすべての民が集められるところで、天国行きの切符を得られるだろう」と。

もちろん、そのように教えられることで、わたしたちが今、どのように生き、どのように振る舞うべきかを方向づける動機付けを与えられるのならば、それでも良いのかもしれませんが。主イエスが、わたしたちの生き方として、社会の中の「最も小さい者の一人」でも決して軽んじないようにとお教えになられたことは、間違いないのです（マタイ 18~19 章）。

けれども、わたしは、今日の主イエスの教えを聞くたびに、後半部分が胸に突き刺さるのです。「あなたは、この最も小さい者の一人にするべきことをしなかったことがあるのではないかと問われているように思えるからです。主イエスは、「したこと」と「しなかったこと」を加点減点方式で採点して最終的にプラスになれば合格、というようなことをおっしゃっているとは思えません。主イエスは、「律法」について教えられながら、「これらの最も小さな掟の一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる」（マタイ 5:19）とおっしゃられたように、徹底して完全であることをお考えのお方なのです。そうであれば、「最も小さい者の一人にするべきことをしなかったこと」が一度でもあれば、それは見咎められなければならない、とお考えなのではないでしょうか。そうであれば、わたしは、主イエスの今日の教えの後半に、打ちのめされるばかりの者であることを、正直に告白しないわけにはいきません。だれも、このことで見咎められずに済ませてもらうわけにはいかないはずです。

主が先頭に立たれてなされるから

これまでにどれだけ、意識して、あるいは無意識のうちに、「しない」で済ませてきたことかと思います。教会には、食べ物を求めて訪ねてくる方がありますし、宿を求めて来る人もありますが、どれだけ応じることができたでしょうか。そのようなことは行政や福祉団体の責任であって、教会の責任ではない、と考える方もありますが、歴史的には、教会こそが率先して、そのような人々の救済活動を実践してきたのです。社会福祉制度があるからという理由で、教会が主の教えとして実践してきたことを蔑ろにしたり、後回しにしてよいということにはならないでしょう。けれども、実際には、できていないのです。牧師個人としても、教会としても、「した」ことの実績以上に、それを「しない」で済ませていることがあるということ、主イエスの前で言い訳することはできません。

そのように嘆いたりしているのだったら、一つでも二つでも、まず実践したらどうだと、問われるかもしれません。そのとおりです。実践すべきです。一所懸命に実践すべきです。わたしたちがまだ自分の手の中に握りしめているものの中から、すべてを献げなくても、そのほんの一部を余計に献げるだけでも、新しい実践を一つ、始めることができるはずです。みなさん一人ひとりが、そのようにして日々、一つ、もう一つと実践に移していただければ、わたしたちの教会としての実践の総体は、どれほど大きなものになるかと思えます。

そうであればこそ、わたしは、なお、今日の主イエスの教えの後半、「あなたがたがしなかったことがある」という指摘を、いつも心に留めていたいのです。このことを心に留めてこそ、今日新たに自分のものの一つを差し出して与える、ということにつながるであろうからです。

この歩みの先頭にお立ちくださるのは、主イエスです。だからこそ、主イエスは、わたしたちを「最も小さい者」とお呼びなのです。主の教えを徹底できず、いつも「しない」で済ませてきたことばかりのわたしたちです。そのような者こそを、主イエスは「最も小さい者」とお呼びくださるのではないのでしょうか。あの律法の教えの中で、「最も小さな掟の一つでも破る者は、…天の国で最も小さい者と呼ばれる」とおっしゃられたのですから。

この「最も小さい者」と呼ばれるしかないわたしたちに、食べさせ、飲ませ、住む家をお与えくださったのは、他でもない天の父である神でいらっしやると、主イエスはお教えなのです。それだからこそ、主イエスは、天の父と同じようになさいました。「天の父が完全であられるように…完全な者とな」（マタイ 5:48）るべきだからです。いいえ、天の父のお与えくださる恵みを知るならば、その与えられた恵みをもって為すべきことを知らずにはいられなかったからです。

わたしたちも、天の父のお与えくださった恵みを数え上げるのです。今まで見過ごしていたような小さな贈り物の一つを、今日、新たに数え加え、知ることができたならば、わたしたちは、今日新たに一つ、自分が為すべきこと、わたしの兄弟である最も小さい者の一人にすべきことを、知る者となるでしょう。いいえ、そうせずにはいられない者とされるのに違いないのです。